

地名句から『奥の細道』を読む

——「本意」の扱いを一つの視座として——

金子俊之

一 はじめに

今日一般に「奥の細道」の旅と呼ばれる元禄二年（二六八九）の奥羽行脚について、従来いわゆる「歌枕探訪」を主要な目的とした旅であったことが指摘されている。これは「奥の細道」（本稿、以下「細道」と略す）の旅への出発直前に執筆された複数の芭蕉書簡の内容、および「細道」本文に見られる「松嶋の月先心にかゝりて」「此たび松嶋・象潟の眺共にせむ」などの記述から見て、まず議論の余地はない。そしてこのことから導き出されるかたちで、これまでの研究の多くが、紀行文「細道」の特徴の一つとして「歌枕探訪記」的な性格を読み取ってきたことも、改めて言うまでもないことであろう。

しかし、実際の「細道」の旅が「歌枕探訪」を主たる目的としていたという事実は、紀行文すなわち一つの文芸作品として執筆された「細道」の性格をどの程度まで規定するものなのだろうか。たしかに「俳文学大辞典」「おくのほそ道」の項（上野洋三氏

執筆）には、「本書は単に旅の報告としての紀行とは基本的に性格が異なる」（「紀行の主題」の項）と明記されているし、たいいていの研究書も「歌枕探訪」は、あくまで紀行文「細道」の一つの側面を示しているにすぎない、と述べてはいる。しかし、近年発表された櫻井武次郎氏「歌枕と俳枕」が、「果たして、芭蕉は歌枕すなわち「名所」だけが念頭にあったのか、「奥の細道」を読んではいけば、「非名所」をも頻繁に訪れていることに気付くはずである。」と指摘するように、筆者にはこれまでの研究が「細道」の「歌枕探訪記」的な性格を特に重視してきた、という印象をどうしてもぬぐうことができない。⁽³⁾

そこで、本稿では「細道」所収句の中から地名を詠み込んだ句（本稿、以下「地名句」と称す）に焦点をあて、その表現上の特質について考察することから右の問題に対する私見を述べてみたい。

二 地名句に対する芭蕉の意識

——理論と実際との距離——

具体的な検討に入るにあたり、まず俳論の中で芭蕉が地名句についてどのような発言をしていたのか、簡単に確認しておく。有名な言葉として、たとえば「名所のみ雑の句有たき事也。十七字のうちに季を入、哥枕を用いていさ、か心ざしをのべがたし」(『桃紙集』傍線筆者、以下同じ)、あるいは「恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきものなり」(『去来抄』故実)といったものが知られているが、これらから明らかのように、芭蕉俳論では地名句の中でも「名所」すなわち「歌枕」に対して言及がなされ、その内容は「名所」を詠み込んだ句は雑の句であつてもよいと説かれていたことで共通している。しかし実際には、後述するように「細道」に現れる地名句の中には「名所」でない地名、すなわち「非歌枕」を詠み込んだ句も数多く見られることに加え、地名句であつても季語の詠み込まれている場合がほとんどであつた(そもそも芭蕉の句には雑の句自体が少ない)。つまり、俳論と実際の作品とのあいだには、大きな隔たりがあると見ておかなければならないのである。そうした状況の中から、櫻井武次郎氏は前掲「歌枕と俳枕」において、「細道」に現れる地名では掛詞的な表現がどのように用いられているのかを総体的に分析され、「芭蕉においては、「名所」と「非名所」の扱いに積極的な違いがあった」ことを明らかにされた。そこで本稿では、この櫻井説を「本意」の扱い方という別の視点から裏づけることからまず始めてゆく。

三 「歌枕」を詠み込んだ地名句の分析

——「歌枕本意」とのかかわりを中心に——

「細道」所収の地名句として筆者が認定したのは、全二七句である。この二七句を、以下「歌枕」を詠み込んだ句・「非歌枕」を詠み込んだ句・芭蕉以外の作者の句、に分類し、それぞれ「本意」の扱い方にどのような特色があるか、逐一考察を加えてゆく。なお、詠み込まれた地名が「歌枕」「非歌枕」のいずれに属するかという判断は、久富哲雄氏「奥の細道歌枕抄」(『鶴見大学紀要 国語・国文学篇』二二・一三・一五、昭和五〇年一月・昭和五一年一月・昭和五三年三月)、大村明子氏「おくのほそ道」の歌枕——名所和歌集の位置付け——(『近世文芸 研究と評論』四一、平成四年六月)で取り上げられた名所和歌集における採録状況、および前出櫻井氏「歌枕と俳枕」での判断によつてゐる。

でははじめに、「歌枕」を詠み込んだ以下の八句について見てゆこう(カッコ内は詠み込まれた地名。以下同じ)。

- 1、早苗とる手もとやむかししのお摺(信夫〔文字摺石〕)
- 2、桜より松は二木を三月越シ(武隈の松)
- 3、さみだれをあつめて早し最上川(最上川)
- 4、語られぬ湯殿にぬらす袂哉(湯殿山〔恋山〕)
- 5、暑き日を海に入れたり最上川(最上川)
- 6、象潟や雨に西施がねぶの花(象潟)
- 7、わせの香や分入右は有ソ海(有磯海)
- 8、蛤のふたみに別行秋ぞ(二見)

近年の研究によって、これら歌枕を詠み込んだ地名句（本稿、以下「歌枕句」と称す）のいくつかが、いわゆる「歌枕本意」——和歌以来の伝統によって培われてきた、その土地固有のイメージ——に忠実に詠まれていることが明らかにされてきている。そのもっとも典型的な例が3「さみだれを」句で、これは「兼好法師集」の「もがみ河はやくぞまさるあまぐもののはればくだる五月雨の比」（二一五）、あるいは「名所方角鈔」の「最上川 早川也」など、「早川」という最上川の本意に沿うよう初案「涼し」から改作されたものである。⁽⁶⁾

そして、これと同様の指摘ができるものに8「蛤の」句がある。この句には、ほとんどの注釈が等しく指摘するように、蛤の「ふた（蓋）」「み（身）」と地名の「二見」、あるいは「別れ行く」と「行く秋」といった掛詞の技巧がこらされている。もちろん、これに関して異論をさしはさむ余地はない。しかし、一方で筆者は「二見に別れ行く」という表現についても一歩踏み込んで考えてみる必要があるように思う。すなわち、なぜこの句に二見という地名が詠み込まれているのか、という視点からの追究である。管見の限りこの視点から言及を加えた注釈はあまり見られぬのだが、実はこれは、『日本鹿子』巻之六に載る、

参宮の人、此浦より行てこりを取て参詣すれば不浄をざりぬ、とて多くハ先爰に行て身を清め、其後さんぐうする也

という記述をふまえたものと考えられる。つまり、二見という地名は「蛤」から導き出されているのと同時に、「細道」の「長月六日になれば、伊勢の迂宮おがまんと」という本文に対応するも

のでもあり、そこには、伊勢参りをする際にはまず二見を訪れて身を清めから参る、という当時の一般的なイメージを重ね合わせる意味があったのではなからうか。このように考えれば、この句も歌枕本意に沿うよう作られた一句と見ることができぬ。

以上二句、それぞれ詠み込まれた歌枕の「本意」に沿うよう作りがなされている例を見てきたが、歌枕句のもう一つの特徴として、和歌以来の伝統的な詠み方が踏襲されていることも指摘しておかなければならない。これは、早く石川真弘氏が7「わせの香や」句を取り上げて、そこに見られる「有磯海」の「有（り）」に「在（り）」の意をかけて詠む方法が、和歌以来の伝統的な詠み方を踏襲したものであることを指摘されているが、同様に1「早苗とる」句の場合も、「しのお摺」に「昔を」徳ぶの意をかけているところが伝統的な詠み方になっている。なお、周知のとおりこの句の初案は「五月乙女にしかた望んしのお摺」というものであったが、この初案から「早苗とる」句への改作の意味について触れた尾形氏「評釈」の指摘もまた、本意とのかかわりについて考えるうえで注目しておくべきであろう。氏によれば、改作の結果一句の中心をなす主人公の心境は、「今」の衰えを慨嘆する気持ちから「古代を慕う気持ち」へとなごめられていたのだと言う（二四六頁）が、この理解の上に立つて許六が著した「俳諧雅楽抄」を参照してみると、

上代の姿 古風残りたる鄙の風俗を称する也（田植の項）と記されており、改作後の「早苗とる」句が「称する」という本意によくかなっていることがわかる。つまり、一句は改作によっ

て、和歌以来の伝統的な詠み方を踏襲しただけにとどまらず、季語「早苗とる」の本意にもかなった句へと改められたのである。

つづく6「象潟や」句は、「西施がねぶ(眠)る」と「ねぶ(合歌)の花」が掛詞で、

・○順和名曰、ねぶりのま唐韻云、椿、(音昏、和名欄布里乃木)。ねぶりのま○和訓義解云、ねぶとは、ねぶりの下略、

(滑稽雑談) 卷之十)

・合歌の花のねぶ気なるは、深一閑の中に縫い物をか、え、
昏眠る女に似たり。

(許六「百花ノ譜」「本朝文選」卷之三、所収)
など、「ねぶ」に関する伝統的表現を遵守したものである。

また、4「語られぬ」句に詠まれた名所「湯殿(山)」は歌枕「恋山」として知られ、名所和歌集は多く「こひの山しげきをささのつゆわけていりそむるよりぬるそでかな」(新勅撰和歌集) 卷第一・恋歌一・六五七・源顕仲の歌を引く。つまり、この歌の「こひの山」「つゆ」と「ぬるる」との関係(縁語関係)は、「語られぬ」句において「湯殿」と「ぬらす」とが縁語関係にあるのと対応するものであり、これまた和歌以来の伝統にのっとったものと言えるのである。なお、講談社文庫「おくのほそ道」が指摘するような、「湯殿山(恋の山)」の本意により、感涙の裏にお手付の濡れ場を匂わせた趣向」をも一句に読み取るならば、先に述べた歌枕本意に沿った句作りと見ることも可能である。

残る二句のうち、2「桜より」句は季語の認定自体が非常に難しいが、本稿では雑の句と判断する。また、5「暑き日を」句に

ついては、今回「本意」とのかかわりを指摘することができなかった。よって今の段階では、「名所句としての最上川は先に出した句(筆者注——「さみだれを」句)に譲り」、「あつみ山」と二句を並べた効果を狙ったのであろう」とする櫻井武次郎氏の見解に従っておくことにしたい。

以上のような分析結果をふまえて歌枕句の表現上の特徴についてまとめてみると、まず、①歌枕本意に沿うよう詠まれていること、②地名に別の意味をかけて詠んでいること、など地名そのものに工夫のこらされていることが見てとれ、加えて、③和歌以来の伝統的な詠み方を踏襲していること、をも指摘することができ。またこのほかに、白河の関や松島などの著名な歌枕では芭蕉自身の句が記されず、代わりに曾良の句が置かれている傾向も見受けられ、このことが、「細道」に対する芭蕉の姿勢について考えるうえで一つの手がかりを与えてくれるものと思われるのだが、詳しくはあとで具体的に論じることにした。

ところで、歌枕に対するこのような伝統遵守の姿勢を評価する際には、いささか注意が必要である。というのも、「新しみは俳諧の花なり」という有名な言葉があるように、蕉風俳諧では俳諧の独自性を「新しみ」に求めていた。しかし、白石悌三氏がすでに「もう一つの「細道」」の中で、芭蕉は吉野・須磨・松島などの歌枕において、その伝統(本意)の前にことごとく新しみの発見に難渋していたと指摘されていたことに加え、本稿でのこれまでの考察からも、歌枕句には「新しみ」といえる要素のあまり見られないことが確認されたからである。つまり白石氏の指摘は、

「細道」の場合、歌枕との関係にはかなり焦点をあてた読み方からは、かえって「細道」の新しさや本当の特色が見えてこないのではないか、という問題提起をされたものと理解され、筆者の関心と重なり合うところが多いのである。

そこで次節では、歌枕と対の関係をなす、「非歌枕」を詠み込んだ地名句の詠まれ方に目を向け、検討を続けてゆきたい。

四 「非歌枕」を詠み込んだ地名句の分析

——季語の「本意」の扱い方を中心に——

ここで取り上げる「非歌枕」を詠み込んだ地名句（本稿、以下「非歌枕句」と称す）は、以下の一三句である。

- 9、あらたうと青葉若葉の日の光（日光）
- 10、田一枚植て立去ル柳かな（遊行柳）
- 11、笠嶋はいづこさ月のぬかり道（笠嶋）
- 12、五月雨の降残してや光堂（光堂）
- 13、蚤虱馬の尿する枕もと（尿前の関）
- 14、有難や雪をかほらす南谷（南谷）
- 15、涼しさやほの三か月の羽黒山（羽黒山）
- 16、雲の峰幾つ崩て月の山（月山）
- 17、あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ（あつみ山）
- 18、汐越や鶴はぎぬれて海涼し（汐越）
- 19、荒海や佐渡によこたふ天河（佐渡）
- 20、しほらしき名や小松吹萩す、き（小松）
- 21、山中や菊はたおらぬ湯の句（山中）

まず、12「五月雨の」句に注目してみよう。この句には、近年永田英理氏による分析が備わったが、その指摘は非歌枕句の特質を考えるうえでたいへん興味深いものとなっている。氏によると、この句で注目すべきは季語「五月雨」で、その本意は「連歌至宝抄」が、

五月雨の比は、（明寒）月日の影をも見せず、道行人の通ひもな
く、水たん／＼として野山をも海にみなし候様に仕事、本意
也

と記すように、「すべてを水に浸してしまふかのように降る」というものであった。しかし、一句はその「五月雨もこの光堂ばかりは降り残した」と、五月雨の本意を直接的に表現するのではなく、逆転させて詠んでいるのだと言う。こうした詠み方は、蕉風俳論において「本意を打ち返す」というふうと呼ばれ、「去来抄」修行に「俳諧は新しき趣を専らとすといへども、物の本性をたがふべからず。もし、その事をうち返していふには、品あり。」と記されるように、「物の本性をたが」わず、それでいて「新しき趣」をもたせる方法と考えられていた。地名と季語とが同時に詠み込まれる点は歌枕句と同じでも、非歌枕句に詠み込まれた地名には広く定着した本意が付与されていなかったため、結果的に季語の本意をどう扱うかというところに趣向がこらされるのは、ごく自然の成り行きだったのである。

そして、この永田氏の指摘を足がかりにさらに分析を続けてゆくことで、非歌枕句には同様の手法を用いた例がほかにも見出されること明らかになってくる。

次の16「雲の峰」句の季語は「雲の峰」。尾形氏「評釈」は一句を、「盛夏の炎天に高く重なり合つて立ち昇つていた雲の峰が、いったい幾つ崩れて、この月光に照らされ雲間に神々しくそびえ立つ月山となつたのであろうか。」と解釈するが、これは明らかに、

六月照日の時分に、白雲の空にたかき峰のやうにかさなるを
いふ也 〔俳諧御傘〕

と記される「雲の峰」の本意を、「崩て」と打ち返した表現である。

また、9「あらたうと」句の季語「若葉」の本意は、諸書、

・すべて夏山のしげみは、日のめもおがまらず、ふる雨ももらず、
〔山之井〕「新樹」の項

・或ハ庭のこずゑ陰しげりぬれば、庭の面もくらくなり、窓の日陰もうとく、月の影ももりこぬ心など、皆新樹の景気也。
〔初学和歌式〕「新樹」の項

と記すように、青葉若葉が勢いよく生い茂るので光が差し込まない、というもので、青葉若葉の下の空間に焦点をあてたものであった。よつて、一面の青葉若葉に太陽の光が燦々と降り注ぐさまを詠んだ一句は、空間（青葉若葉の上と下）、および光が「降り注ぐ↓差し込まない」という二つの意味において、本意を打ち返していると思われることができる。

そして19「荒海や」句については、直前に「文月や六日も常の夜にハ似ず」句が並列されることにより、「細道」の中では恋のイメージを持つ句になる、という指摘ももちろん考慮に入れてお

く必要はある。しかし一句それ自体は、家郷にいる妻子と離れなれになつてゐる佐渡の流人たちに、親しい人々と別れて旅を続ける自らを重ねた句と見るのが一般的であり、ここでもそれを前提として考えてよからう。すると季語「天河」の本意は、

・七月。自_二神代_一七月七日夕契て、ひこほしとたなばたづめとあふ也。
〔八雲御抄〕

・たま〜ふづき七日のこよひ、烏鶺来て、銀河によこたはりつ、橋となり、織女をわたしてあひ見えしむなど侍る。としにひと夜のあふせなれば、
〔山之井〕「七月七日」の項

と記されているのであり、牽牛・織女でさえ年に一度は逢瀬をとげるといふのに、佐渡に流された人々や自分は親しい人々と離れたまま、この七夕の日を過ごさなければならぬ、との内容をもつこの句は、本意を打ち返したものと考えてよいことになる。

なお、17「あつみ山や」句は、諸注指摘するように、南のあつみ山に対して北の地名の吹浦を対置させた句という解釈でもちろんじゅうぶんである。ただ、あえて本意との関係という視点から見てみると、季語「夕すゞみ」の本意は、「梅薫抄」に、

六月渡の発句には、……夕涼をば木陰の東に求る躰、朝涼をば木陰の西に求る躰、

と記されているとおり、東西の関係に基づいたものであることがわかる。それに対し、一句はあつみ山・吹浦という南北の地理関係で応じているのであり、これなどは「品あ」る本意の打ち返し方の一つと認めてよいように思われる。

以上五句、季語の本意を打ち返すという方法によって「新し

み」を打ち出そうとしている様子を見てきたが、次の10「田一枚」句の場合はどうだろうか。この句は、言うまでもなく西行の「みちのべにしみづながるる柳かげしはしとてこそ立ちどまりつれ」〔新古今和歌集〕巻第三・夏歌・二六二を本歌とし、結句「立ちどまりつれ」に対して「立去ル」と表現したところが芭蕉の表現上の工夫であるわけだが、この方法は「俳諧問答」「自得發明弁」に、「翁の句（筆者注——「葛の葉の面見せけり今朝の霜）」は、「葛のうら」と云哥の詞を返し、初て「葛のおもて」とはいはれたり。」とある、「哥の詞を返す」のに相当するものと考えられる。これは直接には本意とのかかわりが認められるわけではないが、本歌に沿った句作りではない、本歌とは違った詠み方をしていくという意味において、前節で見た歌枕句の場合とは明確な差異があると言わなければならぬ。

またこの観点から見ると、21「山中や」句についても同様の手法が用いられていることが確認される。一句は芭蕉自筆懐紙の前書に「彼桃源も舟をうしなひ、慈童が菊の枝折もしらず」とあるように、慈童の長寿の故事をふまえて作られたものであるが、その慈童伝説について記した謡曲「菊慈童」には、

実にも有難き君の聖徳と、岩根の菊を手折り伏せ手折り伏せ、

という一節がある。つまり、「たおらぬ」という表現は、「手折り伏せ」という謡曲中の「詞を返し」たものになっているのである。さらに和歌の用例にまでさかのぼってみると、

・露ながらをりてかざさむきくの花おいせぬ秋のひさしかるべ

く
〔古今和歌集〕巻第五・秋歌下・二七〇、紀友則

・山人のをる袖にほふきくのつゆうち払ふにも千世はへぬべし

〔新古今和歌集〕巻第七・賀歌・七一九、藤原俊成

など、「菊一折る」という連想が和歌以来一貫したものであったことが知られ、一句がこうした伝統的発想を逆転させているといふふうにも見ることができるのである。

以上の七句に共通する表現上の特色をここで前節にならつてまとめてみると、①季語の「本意を打ち返し」て詠んでいる（特に逆転させて詠んでいる場合が多い）こと、②和歌や謡曲の「詞を返し」て詠んでいること、など季語に対して工夫がこらされておられ、しかも和歌以来の伝統とは異なった詠み方をすることで「新しみ」を打ち出そうとしている、ということも言えそうである。

ただし、非歌枕句の中には、歌枕句と同じく本意に近い句作りになっているとしか解せないものが存することもまた事実であり、表現のあり方に不徹底なところがあるといううらみは残る。たとえば、14「有難や」句は、「かほらす南」の表現で季語「南薫（風薫る）」を表しているが、その本意は、

南薫。六月にふく涼風也。薫風自南来と古文前集にいへり。

〔増山井〕

というものであり、涼しさを表現した一句の内容によくかかっている。また、15「涼しさや」句では「ほの三か月の」が「ほの見（える）」と「三か月」の掛詞になっているが、季語「涼しさ」の本意について、「初学用捨抄」は、

夕立の晴のきたる雲の涼しげに、月のさし出たるはえもいは

ぬ気色なり。

と述べているのであり、傍線部と「月がほの見える」という一句の内容とは、やはり重なり合っていると見るべきである。さらに、11「笠嶋は」句の季語「さ月」は、この場合「五月雨」のイメージで用いられているが、その本意には先にも引いた「連歌至宝抄」に、

五月雨の比は、(明巻) 月日の影をも見ず、道行人の通ひもな
く、(以下略)

とあるように、人々の往来がないというものもある。一句はこれを、「細道」の主人公が笠嶋を訪問しなかつた理由に転じて用いており、そこに一応の工夫は認められるわけであるが、結論的にはこれも本意に忠実な表現と見ざるを得ない。なお、13「蚤虱」句の季語「蚤」は、東聖子氏論文での判断にならつて、ここでも横題——和歌以来の伝統的な季語(縦題)に対し、俳諧で新しく詠まれるようになった新しい季語のこと——と見ておく。

このほか、18「汐越や」句と20「しほらしき」句の二句については、今回本意とのかかわりを具体的に指摘するまでにいたらず、なお今後の課題としておかなければならないが、それにしても非歌枕句一三句のうち、少なくとも過半数の七句までが歌枕句とは異なつた本意の扱いをしている、というのは無視できないことである。よつて本稿では、櫻井武次郎氏が述べられたように、「芭蕉においては、「名所」(筆者注) 歌枕」と「非名所」(筆者注——非歌枕)の扱いに積極的な違いがあつた」という見方を結論とし、しかもそれが、単に掛詞という表現のレベルにとどまるの

ではなく、和歌以来の伝統・本意とどのように向き合うかというところにまでおよぶものであり、両者の詠み方に大きな差異を設けることで、非歌枕句の多くに「新しみ」をもたせようとしていたのだと理解しておきたい。

五 芭蕉以外の作者の地名句の分析

最後に、芭蕉以外の作者が詠んだ地名句六句について検討する。これらの句の中には芭蕉の代作である可能性が指摘されているものもあるが、本稿はあくまで紀行文「細道」に記された各句の表現を分析するという趣旨で論を進めており、実際の作者がどうかということとは、ここでは問題としない。

- 22、刺捨て黒髪山に衣更 曾良(黒髪山)
- 23、卯の花をかざしに関の晴着哉 曾良(白河の関)
- 24、たけくまの松みせ申せ遅桜 へ挙白(武隈の松)
- 25、松島や鶴に身をかれほと、ぎす 曾良(松島)
- 26、湯殿山鏡ふむ道のみみだかな 曾良(湯殿山)
- 27、象潟や料理何くふ神祭 曾良(象潟)

一見して明らかなのは、これらすべてが歌枕句だということであるが、第三節で分析した芭蕉句の場合と詠み方に違いがあるのだろうか。このような視点から考えていくために、まず23「卯の花を」句についてなされた乾裕幸氏の研究を見ておこう。

氏の「歌枕の想像力——「おくのほそ道」¹⁷⁾」は、「細道」の中でも特に著名な歌枕である白河の関と松島の章段の文章表現について、「佐夜中山集」(本稿、以下「佐夜」と略す)巻之六「名所之

付合 廿一代集歌詞書等」や「俳諧類船集」(本稿、以下「類船」と略す)といった当時の代表的な付合語集を用いながら考証された論考である。この中で氏は、まずこの二書に収められた付合語を、「歌枕のイメージを支えることばの群団、あるいは歌枕のボエジーの射程内にあることばの群団」と定義し、そのうえで「細道」の文章がこれら「歌枕のイメージを支えることば」をいかに含ませながら形成されているのか検証されている。そして白河の関の場合、文章が終始「歌枕本意に忠実に書かれており、芭蕉じしんによる判断は(旅心定まりぬ)と(青葉の梢猶あはれ也)の二つに過ぎなかった(実景としては(茨の花の咲そひて)が加わる⁽¹⁹⁾)」ことを明らかにされたのである。

これは、「歌枕本意」というキーワードで論じられている点、芭蕉の歌枕句と似ているようにも受け取れるが、結論から言えばそうではあるまい。なぜなら歌枕本意に忠実に書かれているのは、ここでは芭蕉の筆になる地の文だけであり、句そのものに本意のかかわりはほとんど認められないからである。具体的に見てゆくと、23「卯の花を」句は「白河の関」と「卯の花」が付合になっている(佐夜・類船)わけであるが、句意自体は平易で、本意とのかかわりをうかがわせるような形跡は認められない。また、22「剃捨て」句では、「衣がへー卯月朔日」(類船)という付合が「卯月朔日、御山に詣拜ス」、「くろかミ(山)ー雪・かすミ」(藻塩草)の付合が「黒髪山は霞か、りて、雪いまだ白し」、25「松島や」句では、「松島ー鶴」(佐夜)・「松嶋ー有明の月」(類船)・「郭公ー月」(類船)といった付合が「先なつかしく

立寄ほどに、月海に移りて」、27「象潟や」句では、「神祭ー行幸」(類船)という付合が「この処に行幸ありし事いまだきかず」という地の文にそれぞれ生かされていると考えられ、付合語に基づいた本意を利用した表現は、地の文のみに限られていると見てよいものと思われる(ちなみに、25「松島や」句では、句そのものにも「松島ー鶴」(佐夜)・「松嶋ー吉田鶴」(類船)の付合がきかされていると見ることができる)。なお、24・25・27の三句は、堀切実氏が芭蕉発句に特徴的な表現と指摘された「呼びかけ表現」でもあるが、これらにもやはり本意とのかかわりは認められない。また、26「湯殿山」句の季語「湯殿行」は横題である⁽²¹⁾。

以上、芭蕉以外の人物による歌枕句の詠まれ方が、芭蕉の歌枕句のそれとはまったく異なることを確認してきた。ところで、先にこれらの中に芭蕉代作説の行われているものがあることを述べた。結論だけを言えば、その可能性は大いにあり得るのだろう。しかし、そうした事実の詮索よりも、これらの句が芭蕉以外の作者の句として「細道」に収められていることにとどのような意味があるのかを考えることの方が、「細道」研究にとつてはより重要であろう。そしてそうした立場から言うと、右の各句がいずれも「新しき趣」を表現するのに成功せず、しかも本意とのかかわりが稀薄であるという共通点をもっているものであり、そこから、「細道」執筆にあたって、①芭蕉が、本意をいかに扱いながら地名を詠み込んだ句作りをするかという一貫した関心を持って臨んでいた、そして、②その目的を達せられなかった場合には、他人の句を(時に代作することによって)置くという方法をとつてい

た、などといった推測を成り立たせるように思われるのだが、いかがであろう。

六 「細道」の読み直し作業に向けての提言

—— 本稿での問題意識に即して ——

以上のような一連の考察に基づき、最後に、従来の研究において支配的な見方であった「細道」＝「歌枕探訪記」、という図式の是非について考え直してみたい。先に述べたように、これは早く白石悌三氏が「もう一つの「細道」」(前出)の中で、まず一般論として、「縦の題に意欲を燃やした芭蕉であったが、縦の名所題(歌枕)の前に新しみの発見に難渋していた」ことを指摘し、さらに「細道」についても具体的に、

・ 一見歌枕探訪記の体裁をとりながら、多くは道行き風に名を連ねるだけで、実際に見聞したかどうか、主人公の感興も明らかにしていない(そもそも歌枕句が少ない)。

・ 逆に土俗的な風流に目を開いているさまが見てとれ、そこに芭蕉の発見が認められる。

ことなどを述べて問題提起されていたにもかかわらず、近年櫻井武次郎氏が「歌枕と俳枕」(前出)において改めて言及される(本稿第一節参照)まで、ほとんど論じられてこなかった。その理由は定かでないが、この二氏の発言は、ともに「細道」本文に即して検討を加えた結果として「細道」＝「歌枕探訪記」という図式に疑問を呈されているのであり、筆者はそこに大きな意味を感じる。つまり、これは「旅の報告としての紀行とは基本的に性格が

異なる」はずの紀行文「細道」は、本当にそのように読まれてきたのか、言いかえれば歌枕探訪が主たる目的であったという事実にはひきずられた部分が少なからずあったのではないかと²²いう従来の「細道」研究そのものに対する問題提起であり、今後さらにきちんと検証されてゆくべき課題なのである。

また白石氏は同じ論考の中で、「奥の細道」という非歌枕の地名を書名とした理由に、歌枕「蕨の細道」への対抗意識があったこと、そして作品の性格が「雅」に対する「俗」、「みやび」に対する「ひなび」といったキーワードで説明できることなども述べられているが、本稿における地名の詠まれ方という側面から見ても、「歌枕」に対する「非歌枕」、「伝統」に対する「新しみ」の方にこそ芭蕉の力点があったことは明らかである。「細道」の中でも今日特に広く親しまれている章段として「平泉」や「立石寺」などがあげられるが、これらが名所和歌集における採録状況から見ても非歌枕の範疇に入るといってもまた、一つの裏づけとなる。そして、「細道」＝「歌枕探訪記」という図式を問い直すことは、ひいては従来行われてきた関連の諸説を問い直すことにもつながってゆく。たとえば、先に示した井本氏の「細道」二部構成論も、本稿の結論から見れば当然否定的な評価を与えざるを得ない、といった具合である。筆者自身も本稿を、今後さらに行われるべき「細道」の読み直し作業に向けての第一歩と位置づけ、さらに検討を重ねてゆくこととしたい。

使用テキスト 『奥の細道』(芭蕉著、元禄六年ごろ成)：『新編日本古

典文学全集 松尾芭蕉集②(底本は曾良本)、「桃紙集」(長水編、元禄九年刊)：「日本俳書大系 蕉門俳諧統集」、「去来抄」(去来著、宝永元年ごろ成)：「新編日本古典文学全集 連歌論集・能楽論集・俳論集」、「名所方角抄」(伝宗祇編、成立年未詳)：久富哲雄氏「奥の細道歌枕抄」(前出。ただし、底本は寛文二年刊「増補名所方角抄」、「日本鹿子」磯貝舟也編、元禄四年刊)：久富哲雄氏「奥の細道歌枕抄」(前出)、「俳諧雅楽抄」(許六著、宝永三年成)：堀切実氏「翻刻・「俳諧雅楽抄」」(フェリス女学院大学紀要)一一、昭和五一年四月)、「滑稽雑談」(其談者、正徳三年成)：「滑稽雑談」(昭和五三年、ゆまに書房)、「本朝文選」(許六編、宝永三年刊)：「古典俳文学大系 蕉門俳論俳文集」、「連歌至宝抄」(紹巴著、天正一四八―一五八六)年成)：「岩波文庫 連歌論集下」、「俳諧御倉」(貞徳著、慶安四年刊)：慶安四年版本(柿衛文庫蔵)、「山之井」(季吟著、正保五年刊)：「日本俳書大系 貞門俳諧集」、「初学和歌式」(有賀長伯著、元禄九年刊)：元禄九年版本(福井市立図書館松平文庫蔵)、「八雲御抄」(順徳院著、嘉禎元年へ一三三五)・仁治三年へ一四二二)ごろ成)：「日本歌学大系 別巻三」、「梅薫抄」(兼載著、明応年間へ一四九二―一五〇一)成か)：「古典文庫 連歌論新集」、「俳諧問答」(去来・許六稿、元禄一〇年ごろ成)：「古典俳文学大系 蕉門俳論俳文集」、「増山井」(季吟著、寛文七年刊)：「古典俳文学大系 貞門俳諧集二」、「初学用捨抄」(宗祇著か、永正年間へ一五〇四―一五一一)以前成)：「中世の文学 連歌論集二」、「佐夜中山集」(重頼編、寛文四年刊)：「近世文学資料類従 古俳諧編8」、「俳諧類稿集」(梅盛編、延宝四年刊)：「俳諧類稿集索引 付合語編」(近世文藝叢刊 別巻一)、「藻塩草」(宗碩作か、成立年未詳)：久富哲雄氏「奥の細道歌枕抄」(前出) ※このほか、和歌の引用はすべて「新編国歌大観」による(歌番号を付した)。なお引用にあたっては、一部私に表記を改めたところがある。

(注) ① たとえば、元禄二年閏正月または二月上旬筆猿雖(推定)宛・同年二月一五日付桐葉宛・同年三月廿三日付落穂宛、など。

(2) 「奥の細道の研究」(平成一四年、和泉書院) 三六一頁。初出は、「高野山大学国語国文」一三二―二六合併号、平成一三年三月。

(3) その代表的なものとして、久富哲雄氏「おくのほそ道」と名所和歌集(「おくのほそ道論考」平成二二年、笠間書院。初出は、「俳文芸」四、昭和四九年二月)や、「細道」Ⅱ「歌枕探訪記」という前提のもと、「細道」全体の構成について論じた井本農一氏

「おくのほそ道」二部構成論(「芭蕉とその方法」平成五年、角川書店。初出は、「俳文芸」三六、平成二年二月)などがある。

(4) 「奥の細道の研究」(前出) 三七―三九頁。

(5) 本稿では、考察の対象をより広くするために、ある特定の場所を詠んだと認定できる句すべてを含めた。なお、地名を詠み込んだ句として、ほかに「石山の石より白し秋の風」「さびしさやすまにかちたる浜の秋」の二句があるが、これらは比較の対象として詠み込まれているだけなので、今回の考察対象からは除いた。

(6) これについては、大内初夫氏「芭蕉小見」(「芭蕉と蕉門の研究」昭和四三年、桜楓社。初出は、「近世文芸 資料と考証」五、昭和四二年二月)、乾裕幸氏「おくのほそ道」の虚構(「ことばの内なる芭蕉」昭和五六年、未来社。初出は、「国文学」(学燈社)二二―二一、昭和五二年九月)、櫻井武次郎氏「最上川の章」(「奥の細道の研究」平成一四年、和泉書院。初出は、「かつらぎ」七八、平成元年一〇月)などにすでに指摘がある。

(7) もちろん、尾形仍氏「おくのほそ道評釈」(平成一三年、角川書店。本稿、以下「尾形氏「評釈」と略す)に、「伊勢への旅に「二見」の地名を選んだことの中には、「行く先々の苦屋」に応じて水辺にちなむとともに、なお、古歌の逢わぬ恋の余情をこめて、離別の情を託そうとする意図もはたらいていたかも知れない。」(四三六頁)とあるように、これまでにも多少の言及はあった。しかしそれらは、「二見」という地名にもっと積極的な意味を見出そうとする

本稿の立場から見ても、必ずしもじゅうぶんなものとは言えない。

(8) 「わせの香や」句考(「蕉風論考」平成二年、和泉書院)。初出

は、『大谷女子大学紀要』二〇（第一輯、昭和六〇年七月）。

(9) この句の季語である「湯殿（詣）」について、東聖子氏はいわゆる「横題」と見ておられる（芭蕉発句における季語体系（一）——縦題と横題——『蕉風俳諧における季語・主題の研究』平成一五年、明治書院。初出は、『人間文化研究年報へお來の水女子大学』一三、平成二年三月）が、本稿では歌枕「恋山」と密接なかわりを持つ季語であると判断し、縦題と見る。ただし、このことは本稿の論旨に大きく影響するものではない。

(10) 「歌枕と俳枕」（前出）。「奥の細道の研究」（三六九頁）。

(11) 「芭蕉」（昭和六三年、花神社）五九頁参照。初出は、『文学』四三一一、昭和五〇年二月。

(12) 「蕉風俳論における「本意」の一考察」（『日本文学』五〇——二、平成一三年二月）。

(13) ただし直後に引く「その事をうち返していふには、品あり」は、「本意（本性）を反対の面から表現するのには、いろいろなやり方がある」の意に解されるので、その方法は「逆転させて詠むこと」だけに限らない可能性がある（永田論文では「うち返していふ」という表現をとった）。本稿以下、永田論文と同様「逆転させて詠むんだ例」を多く指摘していくことになるが、後述する17「あつみ山」句などは、「逆転させて詠む」とは違った本意の打ち返し方をしていると思われることができる。

(14) 注（9）論文参照。

(15) 注（4）に同じ。

(16) 芭蕉代作説についてはこれまでも数多くの論考が備わっており、ここでそれを逐一紹介することは差控える。ただし、その中でも杉浦正一郎氏「おくのほそ道評釈」（昭和三四年、東京堂）所収の「解題」（白石佛三氏執筆）「作品及び作者の問題、性格」の項、松尾靖秋氏「おくのほそ道」試論——曾良の句についての疑い——（『芭蕉論攷』昭和四五年、桜楓社。初出は、『中村俊定先

生古稀記念 近世文学論叢』昭和四五年、桜楓社）は、「細道」所収の曾良（作とされる）句すべてについて検討を加えられたものであり、ここに特筆しておく。

(17) 「芭蕉と芭蕉以前」（平成四年、新興社）。初出は、『国文学』へ学燈社』三四一六、平成元年五月。

(18) 「芭蕉と芭蕉以前」（前出）一六四頁。

(19) 「芭蕉と芭蕉以前」（前出）一六五頁。

(20) 「芭蕉の呼びかけ表現」（表現としての俳諧——芭蕉・蕪村——『岩波現代文庫』平成一四年、岩波書店。初出は、『近世文学 研究と評論』二九、昭和六〇年一月）。

(21) 注（9）論文参照。

(22) 本稿校正中に恵投いただいた、櫻井武次郎氏「奥の細道の文体——冒頭部分を中心に——」（『親和国文』三八、平成一五年一月）も、現在においても実際の旅と文学作品とを混同する論者のいることを指摘されている（六〇頁）が、その顕著な一例として、本稿冒頭にも記した「奥の細道の旅」という言い回しについて触れておきたい。今日目にするのでできるほとんどの芭蕉年譜類は、元禄二年の奥羽行脚を右のように表現する。しかし、「細道」は単なる旅の事実の記録ではないわけだから、この言い回しが適当であるとは筆者には思われないのである。

(23) 「芭蕉」（前出）六九頁参照。

〔付記〕本稿は、二〇〇三年度早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号二〇〇三A—八二八）による研究の成果であり、俳文学会第五回全国大会（平成一五年一〇月一九日、於佐渡島開発総合センター）における口頭発表の一部に加筆・修正したものである。会場では諸先生から有益なご教示を賜り、その後再考を加えたが、結果的には答えできていない部分もあるかもしれない。このことをあらかじめお断りしておくとともに、ご教示に厚く御礼申し上げます。